松永伍一著

平家伝説

中公新書

340

中公新書　340

松永伍一著

平家伝説

中央公論社刊

宮山春美

松永伍一（まつなが・ごいち）

詩人，評論家，1930年福岡県に生まれる．県立八女高校卒．1957年上京し文筆生活に入る．詩と民俗学的評論を多く書く．

著書『日本の子守唄』（紀伊国屋書店），『底辺の美学』『一揆論』『小さな修羅』（大和書房），『土着の仮面劇』『荘厳なる詩祭』（田畑書店），『土塊のうた』（新潮社），『原初の闇へ』（春秋社），『日本農民詩史』全5巻，『松永伍一著作集』第1期6巻（法政大学出版局）など20余冊．

平家伝説
中公新書 *340*
© 1973年
検印廃止

昭和48年10月15日印刷
昭和48年10月25日発行

著者　松永伍一
発行者　高梨　茂

本文印刷　三晃印刷
表紙印刷　トーブロ
製　本　小泉製本

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋 2-1
振替東京34　電話(561)5921代

はじめに

「秘境」という言葉の持つひびきは、淡く美しく、そして人間のくらしの現実を切り落したような一種の甘さを含んでいる。「辺境」といえば少し頭でっかちで、中央に立っている者のそのことから出てくる後ろめたさが語感にあって、これもどこかによそよそしさがある。私は、少年時代から「秘境」の方に感性をつなぎ、山奥にどんな人たちがどうしてくらしているだろうか、と幻想をたのしんだものであった。実体をわきまえることなしに、幻想をつないでみたところで、それは所詮夢の仲買いに終ってしまうはずだが、フォークロアに赴く道程の上に、幼稚きわまりない私の秘境探索のプランはそのころからあったらしい。

いまおもえば一種の子宮回帰願望のような営みであるが、私は「秘境」と名のつく山間僻地をよく歩いた。そこでつき合わされたのは「平家伝説」であり、それを語る人たちの優しさと愁いとをこめた「落人の子孫です」という一握りの自負であった。五代前まではわかるとしても、それから先はまったくわからない私たち多くの「馬の骨」にとっては、源氏に敗れた平家という漠然とした対立概念でなく、「平清経から数えて……」という語り方をされるのは、おもしろくな

いことであった。敗者の末裔を名乗ることが、周囲あるいは平野の民への抵抗を示すならば、それはそれで興味を持つが、誇らしく系図をさし出されると、こちらの困惑は深くなる一方である。そんな経験をいくつか紡ぎながら、十年ほど前『落人』という一書を編んだことがある。

民衆は、多くの事例をみていけば歴史の中の被害者として位置づけられてきたことがわかる。いつの世も勝者になったためしがない。敗者は、しかし生きのびてきた。その生きのびてきた集積が歴史そのものといえる。私は屈辱の中から、絶望の扉を開いて生きのびるために何かをこしらえずにおれなかった民衆の生のパネを「底辺の美学」と名づけた。「平家伝説」もそのカテゴリーのうちに加えられる重要な題材であった。各地を踏査していくにつれて、私の胸は高鳴り、そして私は次第に失望し、さらにしばらく歩いていくとある種の納得がささやかな開眼になっていく、というのを常とした。パターンができあがっていることに気づいて失望しない者はいないだろう。「平家伝説」はそういう失望を抱かせるに十分なフィクションである。「白いものは何一つ食べません」という。白は源氏の白旗に通ずるからだというきわめて単純な理由による。このタブーの問題を伝承の効用という側面から考えれば、無視はできないが、当事者たちは自分を完全な平家の子孫だと認めているから、思考の伝統がそのまま信仰にまで高まってしまい、手のつけられない暗さを漂わせることになってしまう。

壇ノ浦の平家の男が「平家蟹」となり、女が「河童」になったという伝説も出来あがり、各地

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

に赤色の「平家カブラ」や「目のない魚」や「血の出る泉」など平家の執念をこめた形象物もよく見られることである。そしてそれらの「平家伝説」がそれほど山間僻地や離島の人間を呪縛し、あるいはかれらにカタルシスを味わわせたとするならば、それを民衆の思想や情念の問題として分析してみる必要がありはしないか、私はそう考えてこの一書をまとめてみたのである。古い題材であるが、決して無用な世界ではない。財産とするには掴みどころのないこの「平家伝説」が、貧しさと不便さと蔑視に耐えて生きてきた人たちの心の武器であり得たと考えるとき、こうしたフィクションに結びついた民衆の痛みと充足感は、われわれの一度は関わっていいものであろう。なぜなら、大なり小なりわれわれもまた敗者であった祖先の血を享けて、ねがわくば一度ぐらい歴史の中で勝者の位置を占めようと、厄介な現実を生きぬいているのだから。

そういう個人の「秘境」観から発して「平家伝説」の謎を解こうとした私の十年来の念願を、一応この本に注ぎ込んだとはおもっている。全国に百を超える平家の落人部落があるというが、それらの個々についての紹介は本書の性格上（というより私の論理を整理する必要上）避けた。そして「平家伝説」が鮎の塩焼き程度の観光的味覚にすり替えられている現実を、少々かなしんでもいるということを伝えるにとどめよう。われわれは、「平家伝説」が民衆の忍耐づよい生き方のための潤滑油として役立ってきたこと、偽装することで平野の民からの蔑視をはね返そうとしたことを、民衆史の長い時間の壁に刻み込んでみるべきである。そのとき、「平家伝説」は他者の

領域でなく、自己の課題そのものとなって内に喰い入るだろう。

古い題材も馬鹿にしたものではない。私はそうおもいながら、この一夏を山小屋にこもって書き進めていった自分の日々のイメージをふり返り、山深くわけ入っていた何年か前の私の探訪時の後姿も描きとめているところである。

一九七三年八月

松永伍一

目次

はじめに

I 『平家物語』の内質 3

1 『平家物語』とは何か 4

『平家物語』の結語　『平家物語』と作者

2 隠者文学の可能性 14

巫祝の徒輩　大いなる派生物

3 無常感の尺度 21

清盛における無常　敦盛の死と直実の出家

安徳天皇の入水

II 平家伝説のロマン 41

1 山間民の生態 42

半栽培的生活　あらたな侵入者
2 日蔭者意識と美意識　50
平家部落の構造　実名の剝奪と実名の幻想
3 影の工作者　59
聖の作善　祖谷の平家伝説　系図師
4 「由来書」の構成　75
清経伝説　伝説の役割
5 すりかえられた鶴富伝説　85
鶴富伝説　マキヨム庄屋の話
史実と伝説のすりかえ
6 幼帝思慕とその墓　96
安徳天皇替え玉説　安徳伝説の展がり
安徳伝説の意味
7 維盛をかついだ者たち　118

維盛の厭戦的生き方　熊野と維盛
8 南海の資盛伝説 131
平家伝説の南限　異質文化と伝説
9 俊寛と有王丸 138
俊寛の悲劇　唱導文芸のパターンと有王丸
10 義経伝説との比較 143
個の義経と群としての平家　線としての義経
伝説と点としての平家伝説

Ⅲ 平家部落の現実 153

1 根づよい封建遺制 154
新旧世代の対立　五木村と源氏　落折の連帯意識　能登の時国家
2 「開けずの箱」の意味 173
秘匿の心理　開かれた「開けずの箱」

3 伝説と芸能 181
平曲の世界　潤色された芸能
4 琉球文化との関係 193
薩摩の琉球征服　反薩摩意識と敗者の美学
平氏系図 206

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

平家伝説

I 『平家物語』の内質

琵琶法師（福富草紙より）

1　『平家物語』とは何か

『平家物語』の結語

洋の東西を問わず、いつの時代にも民衆を感興の渦のなかに投げ入れ、奮い起たせ、嗚咽させ、あるいは充足の渕に沈める「物語」が要請される。だれの発案でもなく、おのずからそれが時の要求として脹れあがり、だれの作とも知れずそのままに、「物語」は起・承・転・結をたどりながら、じりじりと求める者たちの胸底を濡らしてきた。民衆は、その無形の財宝を守り、それを後世にゆずり渡すことを無意識に義務と考えてきたところがあった。「物語」の授受関係は、つまるところ「心的財産」の授受関係に他ならず、ひいては「虚像との戯れ」の、「それによるカタルシス」の授受関係とも規定できるものであった、と言えよう。

この『平家物語』は、わが国における戦記文学の精華と目されているものだが、琵琶法師によって伝承された意味を含めると、単なる文学的評価とは異なる一面をわれわれはそこに見出すことができる。古代における『古事記』の成立過程では、諸部族の伝承してきた原話が切り崩され、天皇制擁護のタテ意識（支配の論理）に沿って整序されてきたから、できあがった『古事記』そ

のものの内容とイメージは民衆を躍動させることが少なく、むしろ地域の特殊事情に即応したユニークな説話を濃密に語ることで、官製的世界を無視してきたところがあった。しかし、仏教説話が布教の媒体として民間に持ち込まれるに及んで、霊異譚を恐怖と法悦との婚交したものとして捉えるようになって、押しつけでないイメージを民衆は受け容れ、それらが集合されて『日本霊異記』となり、現実につくり出す人間の諸悪を描写する『今昔物語』へと発展していった。もちろん、文字を通じて内容を摑んでいくというのではない。多くは断片であったろうが、それらの事実とも虚構ともつかぬ世界は、仏教関係者の布教的立場から、情緒にくるまって砂に滲みていく水の湿りのように民衆の内面へ持ち込まれていったのである。『平家物語』はその関係を引き継いだとおもわれる。何かに利用するという強い作為が少ないことで『日本霊異記』より文学的であったし、また事実を冷やかに書きこんだ『今昔物語』の散文性にくらべ、それは叙事詩的韻文性をもって支えとしていたようだ。

問題の根はそこにあった。戦記文学が「武者(むさ)の事」をリアリスティックに描き出したとすれば、それはそれとして重要な地歩を築くことができる。『保元物語』や『平治物語』は濃縮された部分が少ないにしろ、それ自体としては保元の乱、平治の乱の動態をまとめあげている。それにくらべ『平家物語』は、仏教者たちの意識に強力な翳りを投げ入れつつ、それを起・承・転・結をもった叙事詩風の物語におしあげているために、伝達にも適しており、それ自体みごとに文学と

もなり得たのである。「武者の事」を民衆が好まぬということはないが、それが内輪の争乱に終始している場合、全面的に受け容れられないところもあった。のちの『太平記』が「太平記読み」の方法によって辛うじて民衆の胸襟を開いたのをみれば、十分うなずけることである。『平家物語』は「武者の事」を書きながら、その上昇の経過と栄達の極致と滅びの傾斜をサイン・カーブのようにみごとにまとめることで、そこに秘匿されている仏教的意味を表出していたから、伝達方法として『太平記』のような「読み」には不向きで、琵琶を用いての弾き「語り」に適していた、といえよう。

この「語り」の必要は、「六道」（地獄・餓鬼・畜生の三悪道と修羅・人間・天上の三善道）に対する感覚的な受け取り方ができるようになってきた民衆の側からも、おそらく伝達者を刺激する形で出されてきたにちがいないが、中世の暗い地獄的様相もまた時の要求としてそれを確保しなくてはならなかったのではあるまいか。「物語」の要請が、伝達方法としての「語り」の要求になっていくとき、湿りを帯びた琵琶の音色が「武者の事」をのり超えて、右のサイン・カーブを思念のスペクタクルに重ねさせたのである。民衆にとっては、その主役たちが武者でなければならぬことはないが、栄達の極致がまばゆく威圧的であるとき、その帰結としての敗滅は、一種の爽快さに通じてくるから、武者である方が好都合だったということはできよう。直線的進行は、単調ゆえに人に湿りの屈折を与えない。それにひきかえサイン・カーブは出発点と頂点と終着点との

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton